

N響、アクセルロッドと山中千尋と、 ガーシュウィンで ドライブを

オーケストラのドライブ感、ほかの楽器編成ではありえない音色のパレットが豊かな、
ダイナミック・レンジの広さゆえ。
それがオケで聴くガーシュウィンの醍醐味。

オーケストラにも表情がある。指揮者やソリストによって表情が変わるだけじゃない。定期公演か、名曲演奏会か、独自のプログラムをやるか、はたまた、ホームグラウンドではないホールでの演奏かどうかでも、変わってくる。

ここ、東京芸術劇場でNHK交響楽団が昨2015年にみせてくれたのは、シンフォニック・ジャズ。いわゆるクラシックとジャズとの結びついた作品で、バーンスタイン、エリントン、ガーシュウィンの作品がならんだ。今年はその第2回で、プログラムは「オール・ガーシュウィン」。

ラテンの生き生きとしたリズムが「オケの生演奏」を体感できる「キューバ序曲」からメロディーの宝庫たる『ポーギーとベス』、そして、オケの音とコントラストをなす、しかも技巧的なピアノ・ソロを加えての2曲。もともとミュージカルからとびだして、スタンダード曲として世界中で親しまれている「アイ・ガット・リズム」の特徴的な音型が、さまざまなかたちで変奏され、ときには中華街を彷彿させたりもする「アイ・ガット・リズム変奏曲」。そしてトリにはマンガでもドラマでも『のだめカンタービレ』で大きくクローズアップされた「ラブソディ・イン・ブルー」。中高生でこれに親しみいま大学生や社会人になった人たちもけっこういるんじゃないかな？ そして何より、ガーシュウィンのオケ曲は、“古き良きアメリカ”映画のひびき、その画面を想起させる音楽だ。しかも大草原とか沙漠じゃなくて、あくまで都会が舞台の映画。



ジョン・アクセルロッド
©Stefano Bottesi



山中千尋

8月17日(水)19:00開演
コンサートホール

詳細はP12へ

指揮:ジョン・アクセルロッド ピアノ:山中千尋 管弦楽:NHK交響楽団
 ~オール・ガーシュウィン・プログラム~
 キューバ序曲、交響的絵画『ポーギーとベス』、
 「アイ・ガット・リズム」変奏曲、ラブソディ・イン・ブルー

チケット
発売中

【2公演セット券 (8/17N響JAZZ at 芸劇、9/17パーヴォ&N響)】SS席 12,000円 S席 10,560円 A席 9,120円 2公演同時購入で20%OFF

※販売は8月16日(火)まで。※対象席種は、SS・S・A席のみ。※東京芸術劇場ボックスオフィス(電話・WEB)のみ取扱い。※販売状況により、取扱いが終了となる場合があります。主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) / 芸劇



この公演の指揮をするのは、昨年同様、ジョン・アクセルロッド。音楽の持っているドライブ感、音楽を奏でる演奏家のからだのなかで何がおこっているのか、それをどんなふうにしていったら聴き手にも伝わり、ステージと客席とで共有することができるのかを、理知的にもまた感覚的にも伝えることができる指揮者だ。

そして、特筆すべきは山中千尋をソリストに迎えていること。これはいくら強調してもしすぎることはない。世界のジャズ・フェスティバルで、ライブハウスでひっぱりだこのこのピアニスト、いささか私事にわたるが、たまたまごとで昨年から今年にかけて、リハーサルから本番と何日かおつきあいさせていただいた。その演奏の集中度、テンションの高さ、圧倒的なドライブ感、それこそ友人知人にアツク吹聴しまわったほど。一方、本番前にひとりでピアノを弾いているときに心身にあふれる音楽の豊かさといったら！ スタンダードの曲やブギウギ、オリジナル曲のあいだに、ベートーヴェンが、ショパンが、ドビュッシーが、さっと姿をあらわし、さっと消える。べつ曲へと変わる。夢かとおもったのは(誇張ではない!)、スクリャーピンのピアノ・ソナタがひびいたときだ。からだのたうつような上昇音型の激しさにとどけるような甘美さにおもわず鳥肌がたってしまったのだったが、このときほど裏方的な特権を(天に?)感謝したことはない。この人のなかではほんとうに、音楽として、ジャズもクラシックも一緒にあるんだ——。そんな山中千尋が、オーケストラとガーシュウィンを、「2」曲演奏するという豪華さ、贅沢さ。そして希少さ。これを逃すテはない。

わたしの楽しみはといえば、この指揮者、このピアニストとともに、オーケストラがどんな表情になるのかというのがひとつ。もうひとつ、オケのメンバーひとりひとりがきっと楽しんでいる、その個々の表情を見られそうだと、いうところ。こんなプログラム、だから、かなり貴重だ。

文:小沼純一(早稲田大学教授 / 音楽・文芸批評家)

パーヴォ・ヤルヴィ&NHK交響楽団
 9月17日(土) 14:00開演
 コンサートホール
 指揮:パーヴォ・ヤルヴィ
 管弦楽:NHK交響楽団
 ムソルグスキー / 交響詩『はげ山の一夜』(1867 / 原典版)
 武満 徹 / ア・ウェイ・ア・ローンII、ハウ・スロー・ザ・ウィンド
 ムソルグスキー / 歌劇『ホヴァンシチナ』より
 (R.コルサコフ編曲) 第4幕第2場への間奏曲
 「コリツィン公の流刑」 詳細は
 ムソルグスキー(ラヴェル編曲) / 組曲『展覧会の絵』 P13へ



パーヴォ・ヤルヴィ
©Julia Baier

モーツァルト コジ・ファン・トゥッテ

歌劇
全2幕

演奏会形式・原語上演
(日本語字幕付)

謎に満ちた魅惑のオペラを最高のキャストで上演

東京芸術劇場コンサートオペラ・シリーズ第4弾はモーツァルトの傑作オペラ。

名バリトン、トーマス・アレンと指揮者ジョナサン・ノットが手を組んだ企画。豪華ソリスト陣が結集。

「青ひげ公の城」「ドン・カルロス(フランス語パリ初演版)」そして「サムソンとデリラ」と、大好評を博してきた東京芸術劇場コンサートオペラ。今回の「コジ・ファン・トゥッテ」は、東京交響楽団を迎え、同楽団の音楽監督であるジョナサン・ノットが指揮者を務めることで、新たな展開を見せた。ノットは公演のディレクションを名バリトンのサー・トーマス・アレンに依頼。現代最高の旬の歌手たちが顔を揃えることになった。演奏会形式のオペラが大好きだというノットは、指揮だけでなく、この演目で重要なレチタティーヴォ部分の伴奏を、自らハンマーフルーゲルを演奏して行うことになった。ピアノやチェンバロとはまた違った繊細で典雅な響きが期待できる。

「女はみんな、どうしたもの？」

この作品、「女はみんなこうしたもの」という意味だという。台本作者のダ・ボンテが、新聞記事をもとに創作したとも言われるが、真相は不明。一見すると、たわいのない物語だ。美男の若者二人が恋人自慢をしているのをきいたモテない中年男が、彼等に賭けを持ちかける。若者たちは、恋人の貞節を賭け、お芝居をすることになるのだが、事態はとんでもない方向に動き出す。彼等の恋人たちは、変装して入れ替わった新しい相手の方に夢中になってしまったのだ。さて結末はどうなるのだろうか？

19世紀にはベートーヴェンを始めとする知識人たちから、不道徳だと糾弾されたこともある作品だが、今は傑作として人気が高い。アンサンブルを中心とした繊細な音楽は、二組の恋人たちの奥底に潜む心理描写をも、細やかに描きだす。まるでテレビ・ドラマのようなストーリーは、現代の人たちにも

アッピールする内容だ。女性心理を熟知していたモーツァルトが、いったい女はどうしたものかと言いたかったのだろう。「コジ」はそんな謎に満ちたオペラなのだ。

世界超一流のキャストにご注目

ディレクションを担当したサー・トーマス・アレンは、かつては最高のドン・ジョヴァンニ歌手と評された名バリトン。朗々とした美声に加え、演技力も抜群だ。訳知りの老哲学者、ドン・アルフォンソ役はザルツブルグ音楽祭を始め、世界各地で演じて高い評価を受けている。姉妹のフィオルディリーゼを歌うのは、この役を世界超一流歌劇場で歌っているミア・パーション。美人ソプラノとしても有名で演技にも定評がある。妹のドラベッラを歌うマイテ・ポーモンは実力派メゾとして人気が高い。フェルランド役のショーン・マゼイはザルツブルグ音楽祭やエクサンプロヴァンス音楽祭でもこの役を歌った端正な美声テノール。グリエルモ役のマルクス・ウェルバはドン・ジョヴァンニも得意とする美男バリトンで、日本でも人気が高い。デスピーナ役のヴァレンティナ・ファルカスはザルツブルグ音楽祭「後宮よりの逃走」のブロンデ役で人気になった実力派ソプラノ。いずれも「コジ」の舞台で十分な経験を積んだ名歌手が揃った。指揮のジョナサン・ノットはヨーロッパの歌劇場や音楽祭で大躍進を続ける名指揮者。モーツァルトの音楽を知り尽くしたノットが、音楽に焦点を当てたコンサート形式による公演で、この魅惑の作品に新たな光を当ててくれることだろう。

文:石戸谷結子(音楽評論家)

12月11日(日) 15:00開演 コンサートホール

演奏会形式・原語上演(日本語字幕付)
 指揮:ハンマーフルーゲル:ジョナサン・ノット
 舞台監修:ドン・アルフォンソ:サー・トーマス・アレン
 管弦楽:東京交響楽団 合唱:新国立劇場合唱団
 S席:12,000円 A席:9,000円 B席:6,000円
 C席:4,000円 D席:2,000円

チケット
発売中



ドン・アルフォンソ役
サー・トーマス・アレン
©Susie Ahlburg



フィオルディリーゼ役
ミア・パーション
©Mina Artistbilder



グリエルモ役
マルクス・ウェルバ
©Francesco Luciani



フェルランド役
ショーン・マゼイ
©Barbara Aurnuller



ドラベッラ役
マイテ・ポーモン
©Kristen Nijhof



デスピーナ役
ヴァレンティナ・ファルカス
©Kristen Nijhof

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) / 川崎市 / ミューザ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)

<他会場公演>ミューザ川崎シンフォニーホール12月9日(金) 18:30開演 ※川崎公演では、D席の設定はありません。